

# SRID NEWSLETTER

No. 346 SEPTEMBER 2004 国際開発研究者協会 創設者大来佐武郎

〒102 -0074 東京都千代田区九段南 1-6-17 千代田会館 5 階 FASID 内

URL: <http://www1.odn.ne.jp/~cdv20180>

9月号

ニカラグア紹介

在ニカラグア日本国大使館 加賀美充洋

25年ぶりのモロッコ

国際協力機構モロッコ事務所長 辻岡政男

10月2～3日 国際協力フェスティバル出展

お茶の水女子大学大学院 西張由起子/お茶の水女子大学 實方鮎美

## ニカラグア紹介

在ニカラグア日本国大使館 加賀美充洋 (かがみ みつひろ)

マナグア, ニカラグア

日本貿易振興機構(アジア経済研究所)勤務から大使を拝命しニカラグアに来てから1年3ヶ月がたちました。同国は日本にはなじみのない国かもしれませんが、本年6月にはボラーニョス大統領の訪日もあり、また来年2005年は、ニカラグアを含む中米諸国と日本が外交関係樹立70周年の節目に当たります。そこで、この場をお借りして簡単なニカラグア紹介をしたいと思います。

### (1) 国土

ニカラグアの国土面積は12万9541km<sup>2</sup>で日本の約3分の1にあたります。太平洋岸に大小30以上の火山を含む火山帯が走り、首都マナグア市から富士山に似たモモトンボ火山が見えます。マナグア市はマナグア湖とニカラグア湖に挟まれていて、後者は琵琶湖の約12倍大きいといわれ、その湖のなかに大小500の島があります。なかでもオメテペ島は有名で、コンセプションとマデラスという二つの火山が聳えています。ニカラグア湖はカリブ海とサンファン河でつながっていますが、このニカラグア湖には淡水のサメやノコギリ・エイ等が生息することで知られています。

### (2) 政治情勢

#### (イ) 政治体制

共和制で元首は大統領。2002年1月より立憲自由党(PLC)出身のエンリケ・ボラーニョスが大統領に就任しています。任期は5年で、連続再選はできません。議会は一院制で、議員定数は91名(その構成は、立憲自由党<PLC>41名、サンディニスタ民族解放戦線<FSLN>38名、青と白党8名、キリストの道党4名)です。サンディニス

タが現在でも勢力を有しているところに種々の問題があると指摘する人もいます。

#### (ロ) 内政

1972年のマナグア大地震で壊滅的な被害を受けた国土は、1979年のサンディニスタ革命、その後のコントラとの内戦で復興が遅れ、1990年の民主化以降ようやく復興が緒に付きました。しかし、1998年にハリケーン・ミッチが未曾有の被害をもたらすなど試練が続きましたが、民主化以降3代目（チャモロ、アレマンに継ぐ）のボラーニョス大統領の下、国民が一丸となって国の変革と発展に向けて努力を続けています。

ボラーニョス大統領は、「新しい時代」をスローガンに掲げ、アレマン前大統領をマネーロンダリング等の罪で逮捕、訴追する等、特に汚職撲滅に顕著な成果を上げています。

### (3) 経済情勢

#### (イ) 経済概況

ニカラグアの人口は534万人。2003年の一人当たり所得は754ドルと算出され、依然ラテンアメリカではハイチに続く貧困国であります。また、2003年の対外債務残高は65億9400万ドル、一人当たり対外債務額は1235ドルで、世界銀行/IMFより重債務貧困国(HIPC)に認定されています。

2004年1月にはHIPC完了時点(コンプリーション・ポイント)に到達し、HIPCイニシアティブに基づき対外債務60億ドルのうち約45億ドルが債務免除になりました。日本も約130億円の債権放棄を本年7月に行いました。これにより浮いた財源により、社会・経済インフラへの公共投資が今後期待されています。

#### (ロ) 経済指標：2003年

2003年のGDPは42億8600万ドル、経済成長率は2.3%と低迷しました。これは債務免除を得るためにIMFの指導する緊縮財政を守ったためです。物価上昇率は6.5%、失業率は13.5%でした。しかし、対外債務残高は前述したように65億9400万ドルに達しました。

#### (ハ) 貿易

毎年、貿易赤字が続いています(2002年：輸出額5億9630万ドル、輸入額17億9550万ドル、貿易赤字11億9920万ドル)。輸出品目の上位は、コーヒー、牛肉、金、ロブスター、エビ、砂糖など。輸入に関しては、自動車、電気製品等消費財が多い。また、輸出相手国の上位3位は米国、エル・サルバドル、ホンジュラス。輸入相手国の上位3位は米国、ベネズエラ、コスタリカで、輸出の約30%、輸入の約20%が中米域内で行われています。最近では、米国、コスタリカで働くニカラグア人からの本国送金が増えており、7億8800万ドルに達すると推定されています。

#### (ニ) CAFTA

ニカラグアを含む中米諸国では、中米統合機構(SICA)が設けられるなど、中米統合が進展しています。中米諸国はまた、米国との自由貿易協定(CAFTA)交渉を進め、2004年1月に合意に至りました。この合意により、中米は、人口3億2290万人、GDP10兆2000億ドルの巨大経済圏に組み込まれるという大きな経済的転機を迎えており、中米一広い国土、勤勉な国民性、豊かな天然資源を持つニカラグアの今後の発展が期待されています。

### (4) 日本との関係

#### (イ) 外交

1935年に日本と外交関係を樹立しました。第二次世界大戦により一時外交関係が断絶しましたが、1952年に再開。その後、両国は良好な友好関係を維持しており、国際場裡

での協力関係は緊密であります。2005 年は、他の中米諸国と共に、外交関係樹立 70 周年を迎え、「日・中米交流年」として各種記念行事が中米各国で計画されています。ニカラグアでは、記念切手の発行とマナグア市内に日本庭園を含む環境センターの建設が予定されています。

#### (ロ) 経済関係

貿易実績については、日本より乗用車やトラックなどの輸送機器、電気機器を輸出しています(9630 万ドル、2002 年)。また、ニカラグアからはコーヒー、牛肉、ロブスター、エビなどを輸入しています(370 万ドル、2002 年)。なお、日本側の貿易黒字は 10 年以上続いています。投資では、日本の矢崎総業とメキシコ企業の合弁会社が自動車部品工場をニカラグアに作り、2500 人以上の雇用をしています。

なお、2005 年に愛知県において開催される「愛・地球博」にニカラグアは、他の中米諸国と共に中米パビリオンに同国産品を出展することになっています。

#### (ハ) 経済協力

1990 年の民主政権発足後、ニカラグアの安定、民主主義促進、経済復興は中米の平和維持においても重要であるとの観点から同国に積極的な協力を行ってきており、日本はトップドナーの地位を占めています。ニカラグア政府も一般無償案件の「橋梁」(2002 年までに 15 橋建設)等をモチーフにした記念切手を二回に渡り発行する等日本の援助は当国に感謝をもって受け入れられています。援助スキームとしては無償資金協力が主ですが、インフラ整備(橋梁・上水道)、教育(学校建設等)、保健(保健所建設等)、生産分野(食糧増産援助・ノンプロ無償援助等)を中心に行われています(一般無償資金協力は 2003 年度で約 22 億円)。さらに、ボラーニョス政権は汚職・腐敗との闘い、司法・行政改革を打ち出しており、日本としても当国のガバナビリティ向上のための支援(裁判所・検察庁・会計検査院等の建設・強化等)を行っています。また同国は、内戦の後遺症として埋設対人地雷がまだたくさん残存し、その処理のために日本の援助により日本製地雷処理機 2 台がフルに活躍しています。

技術協力においては、91 年 7 月青年海外協力隊派遣取決めを締結し、2004 年 5 月現在 56 名の青年海外協力隊員、及び 7 名のシニア海外ボランティアが活動しています。ニカラグアはサッカーより野球が盛んで、野球を教える協力隊員も来ています。また、2001 年 5 月には技術協力協定が締結されました。経済協力全体として日本は米国、スウェーデン、ドイツと共に、ニカラグアへの最大援助国のひとつです。

#### (ニ) 在留邦人

ニカラグアには、152 名(2004 年 5 月現在)の在留邦人がいます。大使館関係者、JICA 関係者(青年海外協力隊を含む)が大多数を占めますが、特に、青年海外協力隊は 56 名、シニア海外ボランティア 7 名がニカラグア各地で活躍しており、また、彼らを通じた文化交流も盛んです。日本人会も組織されており、総会、新年会、スポーツ大会などの活動を行っています。また、2004 年 3 月には、日本人会として、マナグア・カーニバルに参加し、ソーラン節等を披露、当国の話題となりました。

以上、慣れないことをやっています。本年 10 月 1 日から当館のホームページが立ち上がりますので、ご興味ある方は、外務省([www.mofa.go.jp](http://www.mofa.go.jp))にアクセスして当館(リンク集の在外公館ウェブ)を呼びだして頂けたら幸甚です。

## 25年ぶりのモロッコ

国際協力機構 モロッコ事務所長 辻岡政男

### はじめてのモロッコへの赴任の途中、パリにて

1976年2月、はじめての海外勤務地、モロッコへ羽田空港から出発した。出発前、同じ社宅の先輩職員、黒田さん（OTCA、世界銀行、三菱銀行勤務）に挨拶に行ったら、「パリには田村さんがいるから、連絡すればいいよ」と気楽に紹介してくださった。当時27歳、ずうずうしさにあふれたぼくは、迷わず、パリでOECDに勤務中の田村修二さんに電話をかけた。田村さんは、「お昼頃、事務所にいらっしゃい」と、これまた気楽に返事を下さった。OECDの職員食堂で、お昼からワイン付の食事をご馳走になって、真っ赤な顔をしながら、シャンゼリゼ通りを歩いた。それ以来、この調子で、なにかあると、田村さんに相談にのってもらっている。

ベルサイユ宮殿へ案内してもらっている車中、あまりの嬉しさに、ぼくは、「初めてお目にかかるのに、こんなに親切にしてもらってすみません」と言った。すると、田村さんは、「黒田さんとはSRID仲間です。これは、SRID流の付き合いです。」との応え。右も左も分からない海外経験初日のぼくにとって、田村さんとの出会いは本当に印象的で、その感激は今も新鮮によみがえる。1979年、モロッコから帰国後、SRID会員になって以来、シンポジウム、懇談会、新年会などを通じて、まさしく田村さんからパリで聞いた、SRID流の人間関係を発見させてもらった。互いの所属先を越えて、友人として付き合う。それを実行しておられるすばらしい諸先輩にお目にかかって、今までSRIDを通じて本当にいろいろな人生を学ばせてもらっている。

### 25年ぶりのモロッコ。変わったところ、変わってないところ。

昨年7月から、再びモロッコ勤務となった。25年前と変わったところ、変わっていないところ、両方ある。変わったところは、まず人口。25年前、2千万人の人口が、その後、1千万人も増えて、現在3千万人になった。5割も人口が増えたから大変。一方、旧市街地メディナやフランス植民地時代の地域は建物や道路が昔のままだから、人とぶつからないと歩けないくらい混むようになった。車は多いし、ラバト、カサブランカ周辺のスラム街も大きくなった。通信事情が改善したのも大きな変化だ。25年前、日本との通信は、ほとんどは国際郵便だった。今は、電話、ファックス、Eメール。さらに、携帯電話も日本と同じくらい普及している。旧市街の外側には、新興住宅地が出来た。

変わっていないのは、役所の窓口、レストラン、ホテルなどのサービス精神の欠如。アフリカでは、南アフリカ、チュニジアに続いてモロッコは外人観光客が多い国といわれ、現在、国王自ら観光業の振興の旗振り役を行っているが、現場ではまだまだサービス精神が不足。そして、仕事の段取りの悪さ。組織的に仕事を進めることが苦手で、一人一人が仕事を抱えてしまう。担当者が留守の時は、仕事は完全にストップ。

### 国の発展への期待

25年の時間を経てモロッコへ来ると、懐かしい人々との再会が嬉しい。国全体に見て、知日家、親日家が増えた手ごたえを感じている。日本の援助がモロッコで開始されて、か

れこれ40年。その間に派遣された専門家300人、青年海外協力隊員700人。日本へ招いたモロッコ人研修員800人。この人間の交流が、時間と共に相互理解、友情として発酵しているような気がする。

毎年約80人のモロッコの人々をJICAベース技術研修員として日本に招いている。研修員から出発前の抱負を聞きながら、モロッコの発展について意見を交わすことは楽しい仕事だ。モロッコの人たちの話は、最初は大体、「日本は夢の国だ。伝統と近代化が調和して自力で発展した国だ。」で始まる。さらに議論が熟してくると、モロッコの人たちの口から、次のような話まで聞ける。「モロッコでは、工業製品は全部輸入に頼っている。機械類を自力で開発せず、先進国から入ってきたものを使うだけ。A国の機械が具合悪ければ、ポイと捨ててB国のものを使う。B国の製品が使えなければ、C国のを持ってくる。いつもそんな調子で、自ら工夫することがない。国産といっても、どこかの国のコピーだ。これでは産業は発展しない。」「日本に行ったら、技術だけではなくて、日本の全部を見てきたい。仕事の進め方。日本人をその社会、丸ごとみたい。」

技術研修員として日本へ招かれるのは、モロッコの人口全体からすればごく一部の人たちだが、きちんと日本の長所を見極めようとするモロッコの人たちの姿勢に、この国の将来性を期待している。(2004年9月5日、記)

## 10月2～3日 国際協力フェスティバル出展

お茶の水女子大学大学院 西張由起子/お茶の水女子大学 實方鮎美

毎年、10月第1週の土日に、「国際協力フェスティバル」が日比谷公園で行われます。このイベントは、国際協力に参加する機会をより多くの国民に提供することを目指しています。当日訪れる人たちは、楽しく分かりやすい行事を通して国際協力を身近に感じたり、ODAを含む国際協力の必要性や国際協力における政府・国際機関・NGOの協力についての理解や認識を深めたりします。

今年は10月2日(土)、3日(日)の両日に日比谷公園で開催されます。そして昨年引き続き「SRID(学生部)」が出展します。昨年はこの「国際協力フェスティバル」を機に、国際協力やSRIDに関心を持った多くの学生や一般人の方が、通常の勉強会やメーリングリストに参加することとなり、SRIDのネットワークをさらに拡大することができました。今年もSRIDを多くの方に知っていただき、より活発に活動していくことを目標に、出展準備を進めております。

出展内容は現在、次の4つを中心に準備しています。

### ① SRIDの活動紹介

SRIDの目的や特色、そしてこれまで行ってきた活動等を中心に、ブースに来ていただいた方たちに紹介します。普段の活動である勉強会のレジュメを展示したり、学生部メーリングリスト参加についての案内をしたりする予定です。

### ② スタディーツアー報告(カンボジア編・インドネシア編 写真も含む)

今までのスタディーツアーの報告書の自由閲覧を行います。特にインドネシア編は2004年2月に行ったものの報告になります(現在、最終的な仕上げ作業に取り組んでいます)。私たちが実際に現地を訪れて、学生として感じたことや考えたことを、訪問機

関ごとにまとめております。次回、スタディーツアーを行う際の参考に、実際のスケジュールのたて方や、各訪問機関との連絡をどのように進めていったかも紹介しています。当日はスタディーツアー参加者もおりますので、直接話を聞くこともできます。

③ 「日本の新ODA政策に関する構想」の提案

昨年8月に発表された新ODA大綱。発表前の意見公募にSRID本会有志による構想案が提出されました(学生部は構想策定前段階の調査に協力しました)。昨年出展した際には活動の一環として紹介しましたが、とても好評でしたので、今回は自由閲覧を行います。SRID本会によるパブリックコメントがどのように新大綱に盛り込まれたか、それが一目でわかるように、新ODA大綱とあわせて用意しますので、実際に見比べてみてください。

④ SRID学生部玉川大学支部による報告／展示

SRID本会会員である高千穂先生のゼミ生による報告／展示も、昨年に引き続いて行います。今年はタイとカンボジアを研究対象地域に選び、貧困解消をメインテーマとした調査(テーマ調査・意識調査)をします。現在ゼミ生たちは、この夏休みを利用して現地におもむきフィールドワークに取り組んでいますので、当日は現地で入手した資料も揃える予定でおります。SRIDのブースに来た際にはフィールドワークの報告／感想を楽しみつつ、テーマ調査・意識調査にもぜひ、ご協力ください。

国際協力の必要性や、政府・国際機関・NGOの協力についての理解と認識も深めてもらうことを目的とする「国際協力フェスティバル」。当日は開発援助機関であるJICA、JBIC、JETROを始めとし、国際機関や各国の大使館、国際協力NGOが多数出展します。それぞれの機関・団体によって、広く国際協力を知ってもらうべく様々な展示やイベントが行われるので、毎年たくさんの人々が訪れ、会場は非常に賑わいます。そうして訪れる多くの方々にとっては国際協力を「始める」きっかけになるイベントですが、学生にとっては国際協力をより深く知り、自身の関心を高める機会となります。特に大学3、4年生にとっては国際協力の現場で「働く」ことについて知り、考える機会にもなります。

最後になりますが、今回の「国際協力フェスティバル」への参加に際して、本会の方々にたくさんのご協力をいただき、本当に感謝しております。また、本会では出展料も負担していただいております、そのことについても、重ねてお礼申し上げます。SRID全体がより活発で広い組織となっていくよう、学生部も出展準備に力を入れていきますので、当日、お時間がありましたら是非、「SRID(学生部)」のブースにお越しください。場所はレッドゾーンの38ブース(R-38)で、テントに中央にある「国際開発研究者協会(学生部)」の看板が目印になります

